

ブエノスアイレス日本人学校における国際理解教育の実践

前ブエノスアイレス日本人学校 教諭

茨城県龍ケ崎市立長山小学校 教諭 海老澤 大 輔

キーワード：現地校との交流、キャリア教育、人材活用

1. はじめに

1816年7月9日にスペインから独立を宣言したアルゼンチン共和国は、私が赴任していた2016年に建国200年を迎えた。国土面積が世界第8位の南北に連なるこの国には、灼熱のジャングル地帯から年間を通して夏が訪れることのない氷の大地までさまざまな地域がある。日本との時差が12時間、移動に約30時間もかかる、日本から一番遠い国にあるブエノスアイレス日本人学校への赴任が決まった時、地球上で正反対にある国がどのような場所なのか、どのような文化なのか、どのような人たちが生活しているのか、全く想像できなかったことを今でも覚えている。



この国の首都、ブエノスアイレスはヨーロッパからの移民が築いた街であり「南米のパリ」と呼ばれている。人口は約290万人、面積約200km²のこの都市は、ラ・プラタ川河口に広がる港町でもある。人々は自分たちのことを「港の人」という意味と「おしゃれな都会っ子」という意味を含んでポルテーニョと呼ぶ。ちなみにブエノスアイレスとはスペイン語で「良い空気」という意味であり、その名の通り気持ちの良い青空がいつも頭上に広がっている。

この国の教育制度であるが、現在の学制区分は、幼稚園（4歳～6歳）小学校（7歳～13歳）中学校（14歳～18歳）高等教育機関（19歳～20歳）となっており、アルゼンチンの学校制度は、初期教育（Educacion Inicial）初等教育（Educacion Primaria）中等教育（Educacion Secundaria）高等教育（educacion Superior）から構成されている。初等教育と中等教育の12年間を7年+5年とするか、6年+6年とするかは政府ではなく各州の裁量に委ねられている。

3年間在籍していたブエノスアイレス日本人学校は、1968年に開校し、来年（2018年）で開校50周年を迎える。現在は、小学部21名、中学部4名（2017年3月）が在籍している。そのうちおよそ半数は保護者が自動車関係の仕事に携わっており、駐在の任期はだいたい3年である。1年間に学校全体のほぼ3分の1の子ども達が入替わり、近年児童生徒数は減少傾向にある。



私が赴任していた3年目は、中学1年（1人）中学2年（2人）中学3年（1人）の複式学級の担任をやらせていただいた。同じ教室に中学1年生から中学3年生が在籍しており、数学や総合、音楽の授業など3つの内容を同時に展開していくことに初めは戸惑いを感じていたが、無事に任期を終えることができた。3年目に特に力を入れた現地校との交流、キャリア教育についてここでは紹介していきたい。

2. 実践内容

（1）現地校との交流

①イングリッシュ校との交流

イングリッシュ校とは、日本人学校から徒歩5分の所にある正式名称がBuenos Aires Ingles High Schoolと

呼ばれる小中一貫の学校である。ここの学校とは、数年前から交流をしており、日本人学校の子ども達がイングリッシュ校に向かう交流とイングリッシュ校の子ども達を日本人学校に受け入れる交流の2種類がある。年間数回交流しており、低学年、中学年、高学年（中学部含む）と3グループに分けて実施している。

日本人学校に来た時の主な活動としては、低学年は日本の昔の遊び（けん玉・福笑いなど）、中学年は日本の歌（さくらさくら・こいのぼり）紹介、てるてる坊主づくり、高学年はおにぎりづくりといった日本文化や日本料理を紹介したり、体験したりする場となっている。私が6年生を担当していた2年目は、習字の練習を一緒に行った。イングリッシュ校の子ども達は初めて見る文字や筆を興味深く観察していた。日本人学校の児童が名前を聞き、それをカタカナで半紙に書き、プレゼントとして全員に贈呈した。みんなともうれしそうに持ち帰っていた。中には、自分の名前を習字で進んで練習している子もいた。

逆にイングリッシュ校へ訪れた時には、現地の遊び（テホ）やスポーツ（陸上ホッケー・サッカー）などを通して交流を深めた。子どもたちは、共通する言語である英語を駆使して言葉による交流を図るとともに、スポーツや遊びを通して非言語による交流も行った。この体験を経て、子ども達は日常から英語を使おうとする態度が見えた。また、教わってきたアルゼンチンの遊びを日本人学校で取り組んでいる姿も見られ有意義な現地理解教育となった。

②日亜学院との交流

日亜学院とは、アルゼンチンで唯一日本語教育を行っている学校で、もともと日系人が自分たちの教育を行うために設立された100年近い歴史をもつ学校である。この学校とは、2回の交流（2月に10名を1週間受け入れ、3月には日本人学校の全校児童生徒が日亜学院で体験授業）をしている。

日本人学校で日亜学院の子ども達が1週間学ぶ際、基本的には普段の授業を一緒に行く。日亜学院では、日本人学校での体験入学希望者が多数いて、その選考に苦労しているという。日常の勉強をしっかりとがんばった者のご褒美として日本人学校に来ることができる。日亜学院の児童はほぼ日系人かと思いきや、6割近くが現地の方だという。それにも関わらず、体験に来ている子ども達は皆、日本語に興味があり、1週間をとっても意欲的に過ごしている。日本的な活動に感じるのか、一番の楽しみに清掃活動をあげている子どももいた。

3月の長期休業には、2月とは反対に日本人学校の児童生徒が日亜学院に出かけ、1週間で体験入学を行う。日亜学院の先生は、日本語を理解し話す先生が全てではない。言葉の壁に苦労しながらも全教育活動を共に行き、1週間過ごす。黒板に書かれる文字はスペイン語、しかも筆記体である。低学年の児童は、そんな暗号に近い文字を必死になってノートへ写していた。全身で異文化交流を体験できるとても良い機会であったと考えられる。この交流期間を通して、子ども達はさらにスペイン語を学習しようという意欲が高まった。

(2) キャリア教育を通して

ブエノスアイレス日本人学校では、総合的な学習の時間に横断的にキャリア教育を展開している。内容は現地企業や消防署などの見学学習と講師を招いて講話を頂くという活動など、学年によってさまざまである。中学部担任をしていた3年目には、現地理解をさらに深めるため、また生徒の職業観や勤労観を養うために、数回キャリア教育を実施した。駐在をしている保護者や現地で働いている方の協力を得ながら展開することができた。

①在アルゼンチン日本国大使館見学

保護者に大使館職員がいたので、協力してもらい大使館見学を行った。子ども達は、海外で生活していると、1度は大使館へ行ったことがある。ただ、そこでどのような仕事をしているかについては理解が不十分であったので、事前に質問をまとめ、担当の方それぞれに班の仕事について紹介してもらった。官

房班、政務班、医務班などたくさんの班が連携して仕事をしていることが理解できた。また、海外で生活しているとあまり気付かないが、大使館の支えがあってこそ、そこでの生活が成り立っていることを肌で感じる事ができた。最後に大使のご配慮で大使室に通され、短い時間ではあったが談話をする事ができた。日本の代表として仕事をされている方の言葉の重みを痛感していた。

②総合商社の代表者による講話

アルゼンチンに進出している日本の総合商社は数社ある。各社はアルゼンチンの原材料や鉱物に着目し、それをもとに取引を行っている。その中で保護者が代表をしているある会社の仕事について講話をいただく機会を設けた。その総合商社はアルゼンチンの小麦を日本へ輸出し、コンビニエンスストアやスーパーマーケットに並んでいる食品に加工する事業を行っていた。子どもたちは、日本でよく通っていたコンビニエンスストアに並んでいる食材が、元をたどればアルゼンチンの小麦から始まっていることに驚いており、日本とアルゼンチンの物による結びつきを感じる事ができた。講話の後「将来、総合商社の仕事に就きたい」という感想を書いている子もいた。

③ラジオのパーソナリティーの方による講話

日本人学校の現地語の教師をしていた先生でラジオのパーソナリティーの仕事をしている方がおり、講師として招いた。そのラジオ番組は「JAPON HOY (今の日本)」という毎週放送されている、日本の情報や文化をスペイン語で伝えている番組である。子ども達は興味深く話を聞いていた。また、実際にラジオ放送をしている所(ラジオパレルモ)へも訪れ、生放送をしている様子も見学できた。ほとんどがスペイン語での放送であったが、急きょ代表の教諭がゲストとして参加する場面があり、そこでは日本語とスペイン語を交えて交流できた。生放送であったので、その音を録音し、後日他の学年と一緒に聞いて全校児童で触れる事ができた。

④パナソニックアルゼンチン見学

パナソニックアルゼンチンで働いている方のご配慮で、高学年の子ども達を会社へ招待してもらった。その方は以前PTA会長をされていた方で、お子様も日本人学校にかつて在籍していたという。活動の流れは、事前に子供達が質問を考え、それをもとに当日講話をいただいた。子ども達はパナソニックと聞くと電化製品を想像していたが、家や飛行機のモニターにまで手広く展開している事業に驚いていた。また、講師の方に「中学時代どのような生徒であったか」を話していただき、子ども達と同時期にどのようなことを考えていたのか、自分と比べることで子ども達に大きな刺激となった。最後に工場内を見学させていただき、日本企業の製品がアルゼンチンまで届けられ、販売されていることを目の当たりにし、改めて日本の技術、製品の質の高さを感じる事ができた。

3. おわりに

現地校との交流では、普段学習している英語、スペイン語を実践的に使える場としてとても有効であり、同年代の子ども達と触れ合うことで刺激をたくさん受けながら交流する事ができた。キャリア教育では、様々な職業人の講話を聞くことで、働くことの意義や難しさについて理解すると共に、自分の将来についてのイメージを漠然とながらもつ事ができた。

また、私自身もさまざまな生徒や講師の方との交流を通して、アルゼンチンについての現地理解を深める事ができた。子ども達に伝えるには、やはり自分で実際に経験をしないと見えない部分が多いことについて、改めて感じる事ができた。

昨年末には、安倍首相がアルゼンチンを訪問した。日本の首相としては57年ぶりのことであった。また、今年

の5月にはアルゼンチンの大統領が日本を訪れた。今後、さらに日本とアルゼンチンの交流が盛んになることを期待している。そして帰国したこれからも在外派遣で学んだことや経験したことを子ども達に発信し続け、国際社会で活躍する人材を育成していきたい。